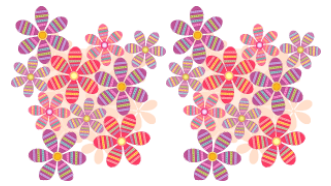


教育研究員の感想

「記念講演会」では、幼児教育が、全て自分の子育てや1年担任の経験とつながりました。あの出来事は、こういう理論に基づくものなのかと、点と点が線になってつながっていく感覚で、すんなり自分の中に入っていきイメージでした。特に印象に残った言葉は、次の3つです。「子どもにとっての安心感や居場所づくり」「先生が全て教えるのではなく、環境に教育の意図を埋め込む」「子どもに委ねた方がいいこともある」



教師が頑張るのも大事ですが、子ども自身が成長する姿に寄り添う視点を忘れないようにしたいです。

「教育講演会」は、昨日の幼児教育の講演とつながっていて、授業における大切な視点がたくさん聴けました。「教師だけが教えた気になっている。」という言葉が何度も出てきて、反省させられました。ビデオにあった、数学の授業での教師のつながりは、見習いたいと思います。深い教材研究と児童を観察する力が必要だと再認識しました。
(上原馨)

「記念講演会」では、子どもがあこがれている経験をもつと伸びるといいう話では、ターザン遊びがうまくできない子ができる子のやり方を観察して、やり方をまねている様子がありました。体育の授業でも、鉄棒でできない技があると、できる子のやり方をじっと見ている子がいて何度も挑戦して出来なかったらやり方を教えてもらっているうちにできるようになった子のことを思い出しました。意欲が出てくるとよく出来る子を見る、見る力を育てることが大事という話がつながりました。教師がやり方を教えていくことも大事だけど、自分でやり方を見つけていく環境を作ってあげることも大事なんだと感じました。



「教育講演会」では、授業中心のお話だったのでよりイメージがしやすかったです。授業をして分からない子どもがいると側に行き質問をしたりすぐに教えたりしていました。ある学校の授業では、先生が分からない子の所に行き質問ではなく、その子が分かっている所まで聞いてあげ、その後アドバイスをしていました。その子はひらめき、理解すると、隣の子に説明をしていました。分からないとすぐに教えてあげたくなるけれど、どこまでわかっているのかを子どもに説明をさせていきどこでつまづいているのかを理解して、そこからアドバイスをするといいのだと思いました。子どもによりそって聴き、待つことができる教師になりたいと思います。
(下地こず恵)

秋田喜代美教授の「記念講演会」はとても分かりやすく、新鮮な気持ちで聞くことができました。お話を聞きながら「子どもは自発的に伸びる力をもっているんだ」と思いました。ただ、様々な刺激を与え、その力を引き出すためには、教育者・保育者が教育環境をていねいに構築することが大切なことなんだと感じました。小学校とも共通する点があるので、今後の学級経営に活かせればと思います。



「教育講演会」は小中高の学校の先生方を対象とした講演会だったので、昨日の講演会の内容とのつながりを意識しながら聞きました。私が特に気にしていたのは、「子ども達の思考のつながり」です。思考を引き出すための問い、つなげる問いや道具、関わりあいの深め方など、いろいろな工夫を授業に取り入れながら進めることが大切なんだと感じました。また、事前研究会や事後研究会での話し合うポイントはどんなことが大切なのかも知ることができ勉強になりました。
(仲門学)

秋田教授のお話で一番心に響いたのは「聴くこと」「待つこと」の大切さです。生徒の気づきを待ち、そこから自らで答えを見つけることが学びで有ること。



教師は教え込むことに集中するあまり、生徒が何を学んだか見ていなかったのではないかと生徒のつぶやきを聴いていたかと反省させられました。

学習課題を明確にして、あとはなるべく生徒にゆだねていくことも大事だと思いました。それと同時に日々の授業をどう充実させていくかが大切だと思いました。

「将来の夢」の授業で生徒の心に少しでも灯がともせたらと思い、これから研究に頑張っ取り組んで行こうと前向きな気持ちになりました。
(横田純子)